

ギャンブル障害および ギャンブル関連問題の実態調査 調査B・調査C 結果概要

独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター
新田千枝、松下幸生、遠山朋海、樋口 進

調査B ギャンブル問題で相談機関や自助グループを利用する者の実態調査

●目的: ギャンブル等依存の問題を抱えている者(当事者・家族)の特徴やギャンブル関連問題の実態把握

●調査対象

- 1) 依存の問題での公的相談機関※精神保健福祉センター(全69か所)、保健所(84か所)に来訪した当事者とその家族
- 2) ギャンブル問題の自助グループ参加者(当事者または家族)

●調査手法 相談機関職員から来訪者に調査案内および調査票を配布。回答方法は郵送orインターネット

※調査手法上の限界:各施設で配布した調査票総数の情報が得られず、回収率が不明。

→調査Bの結果はサンプルの代表性について課題を残した。全国の傾向として一般化することはできない。

→現時点での「**ギャンブル問題を抱え、公的相談機関や自助グループに支援を求め利用した当事者や家族の特徴**」として解釈

●調査項目

当事者票

- ・基本属性(性別, 年齢, 婚姻状況, 同居者, 職業, 年収等)
- ・依存問題の種類, 相談経緯
- ・ギャンブル行動
(過去1年ギャンブル経験の有無, ギャンブルの種類, 頻度, 使う金額等)
- ・ギャンブル障害のスクリーニングテスト(PGSI, NODS-CLIP)

- ・ギャンブル関連問題(多重債務, 養育困難の有無, 小児期逆境体験, 希死念慮・自殺企図の有無, 抑うつ気分尺度(K6), 触法行為の有無)

- ・クロスアディクション
アルコール使用障害のスクリーニングテスト(AUDIT-C)
インターネットゲーム障害のスクリーニングテスト(IGDT-10)

- ・治療機関や自助グループ, 回復支援施設, 相談経験
- ・行政への要望

家族票

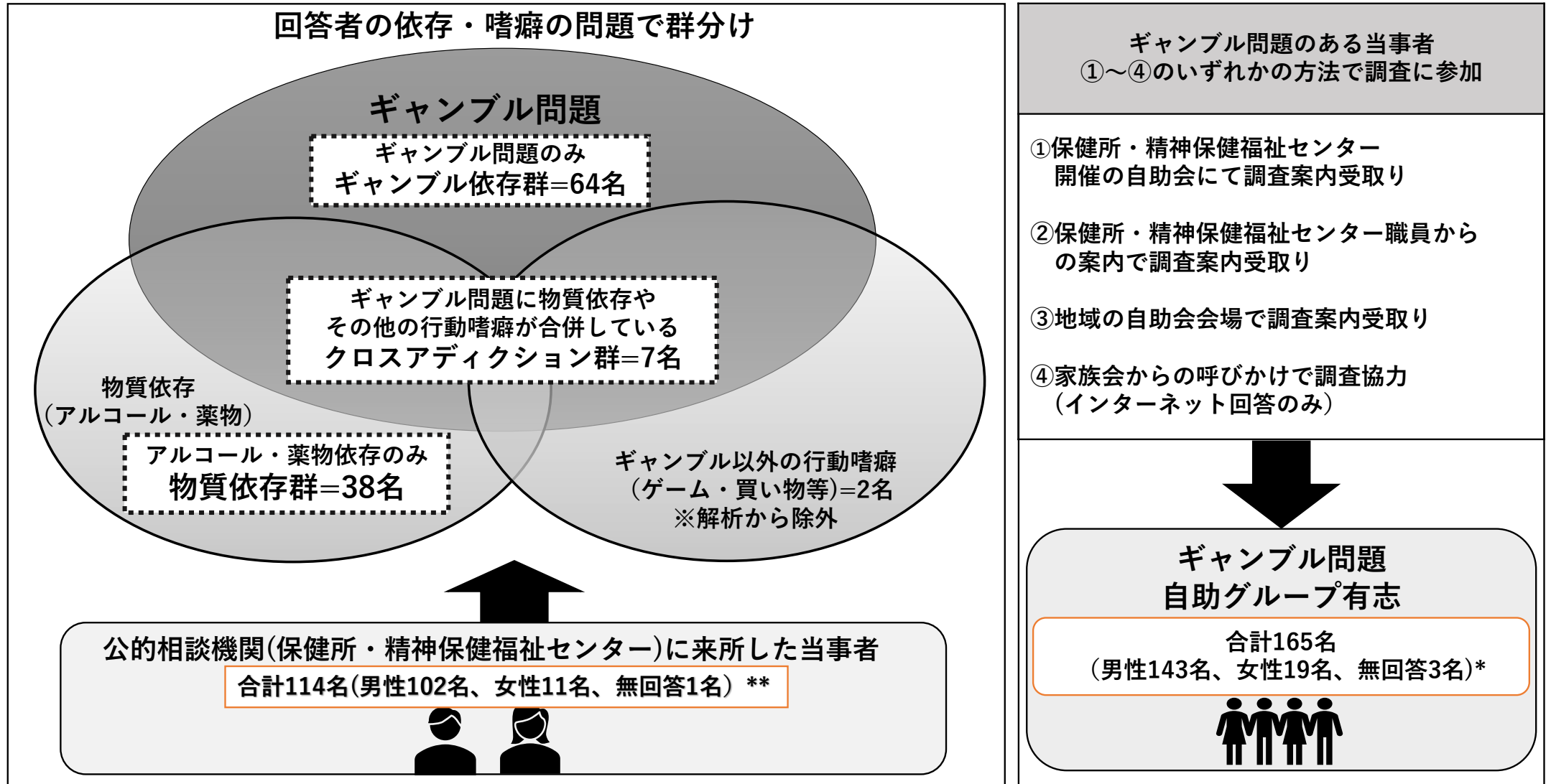
<さまざまな依存問題 家族共通>

- ・相談経緯, 性別, 年齢, 婚姻状況, 同居者, 職業, 年収, 当事者との関係
- ・抑うつ気分尺度(K6), 希死念慮・自殺企図の有無, 養育困難の有無
- ・小児期逆境体験の有無
- ・依存問題の相談経験の有無
- ・行政への要望, 自助グループ・家族会等の利用経験の有無等
- ・当事者の依存問題の種類, 当事者の生活支援制度利用の有無, 当事者の触法行為を含む問題行為の有無等

<ギャンブル問題を抱える当事者のご家族への質問>

- ・問題となっているギャンブルの種類
- ・家族がギャンブル問題から受けた影響
- ・借金(立て替え経験)の有無
- ・ギャンブルの停止状況

当事者回答 有効票の概要



**[問8]で依存問題が無回答の3名は解析から除外

*[問7]で調査票を受け取った場所が無回答の82名は解析から除外

調査B 当事者回答 ～性別、年齢、職業などの背景情報～

図表1 当事者回答-年代分布

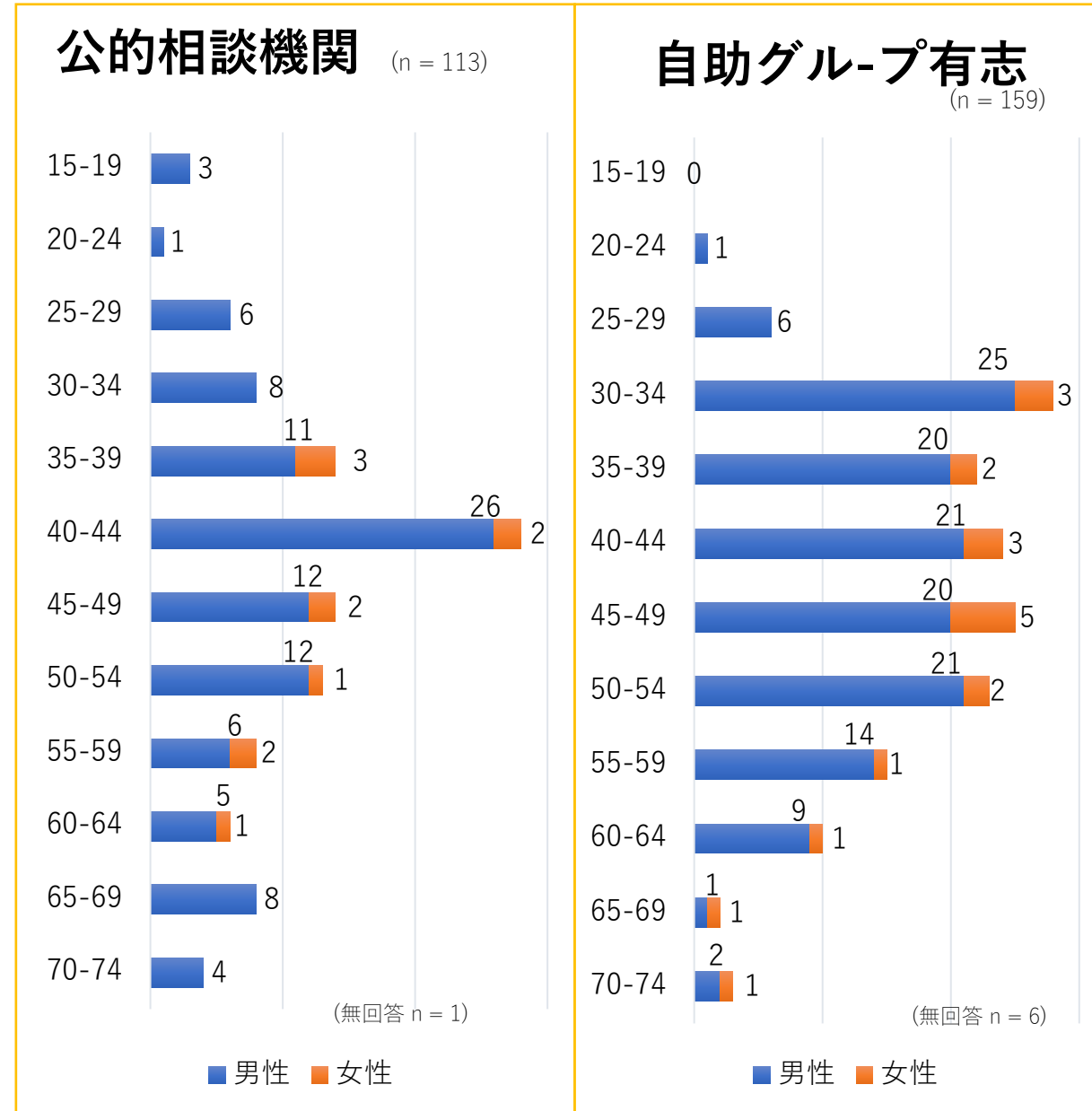
単位:人数

項目※	公的相談機関		自助グループ有志	
	男性	女性	男性	女性
性別	102名 (90.3%)	11名 (9.7%)	143名 (88.3%)	19名 (11.7%)
平均年齢※※	45.5歳 (±12.8)	46.4歳 (±9.2)	44.5歳 (±10.8)	47.0歳 (±11.2)
就業者	80名(70.2%)		133名(81.1%)	
失業・求職中	23名(20.2%)		16名(9.8%)	
既婚	45名(39.8%)		75名(45.5%)	
年収※※※	300万円以上～ 400万円未満		400万円以上～ 600万円未満	

※項目ごとに欠損値があるため全体数が異なる

※※カッコ内は標準偏差

※※※度数分布で、人数割合の最も高い年収階級



調査B 当事者回答 ～ギャンブル開始の状況、借金額、相談支援につながるまで～

項目※	公的相談機関(公的)		自助グループ有志(自助G)	
	男性	女性	男性	女性
ギャンブル開始年齢※	20.6歳	25.8歳	20.2歳	20.7歳
初めてギャンブルした時の状況	第1位 「ギャンブルをする友人に誘われて」(公的:49.0%、自助G:46.4%) 第2位 「自分一人で」(公的:26.5%、自助G:31.9%)			
月1回以上の習慣ギャンブル開始年齢※	23.6歳	30.2歳	23.7歳	23.9歳
ギャンブルに関連した借金	中央値:300万円 平均値:394万円		中央値:300万円 平均値:750万円	
ギャンブルの問題に気付いてから自助グループに参加するまでの期間※※	平均47.6ヵ月		平均63.1ヵ月	
相談や自助Gにつながったきっかけ	相談機関利用のきっかけ 第1位 「家族にすすめられた」40.7% 第2位 「自分からHPなどで探した」22.1% 第3位 「知人・友人にすすめられた」11.5%		自助G利用のきっかけ 第1位 「家族にすすめられた」43.8% 第2位 「医療機関ですすめられた」29.6% 第3位 「自分からHPなどで探した」27.8%	

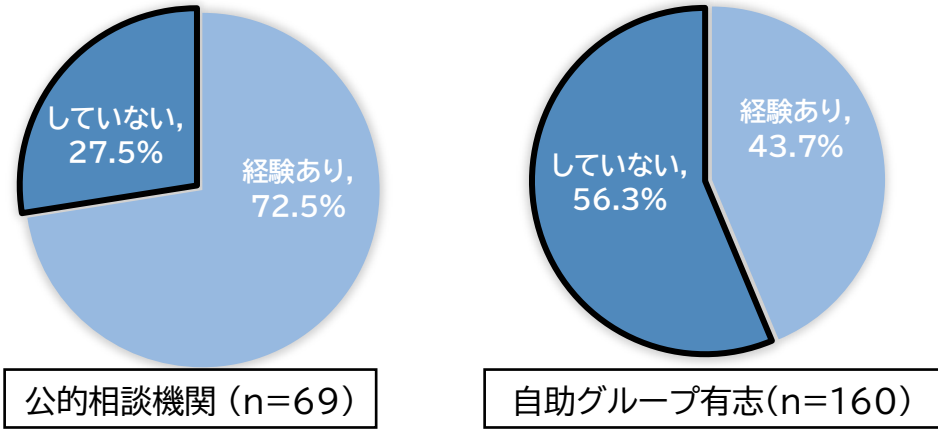
※ 平均年齢

※※ 公的相談機関の来訪者については、ギャンブル問題を主訴とする者を抽出した結果

調査B 当事者回答 ～過去1年のギャンブル経験、最もお金を使ったギャンブル～

●本調査におけるギャンブル種の定義
パチンコ、パチスロ、競馬、競輪、競艇、オートレース、宝くじ、サッカーくじ、証券の信用取引、先物取引市場への投資、FX、公営ギャンブルを除くインターネットを使ったギャンブル、海外のカジノなど。

【図表2】 過去1年間のギャンブル経験の有無※



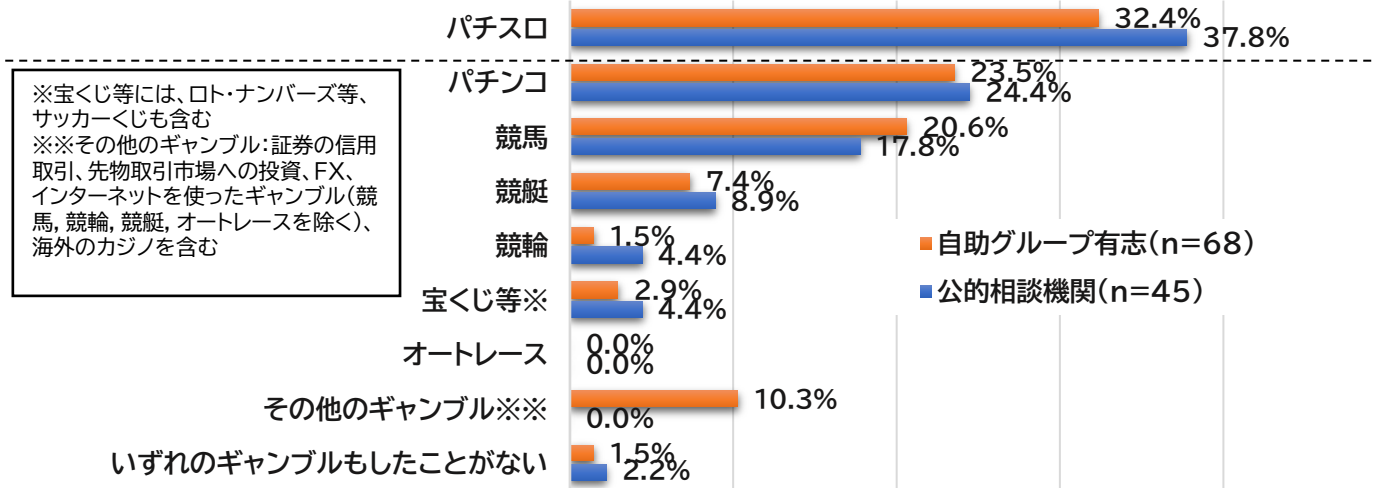
【図表3】 過去1年間ギャンブルをしていない理由

	公的相談機関 (n=19)	自助グループ有志 (n=90)
医療機関で治療を受けてやめたから	9(47.3%)	20(22.2%)
自助グループに通ってやめたから	14(73.6%)	84(93.3%)
特に理由はない	0(0.0%)	4(4.44%)
ギャンブル以外の楽しみをみつけたから	4(21.0%)	33(36.6%)
お金がないから	4(21.0%)	10(11.1%)
その他	4(21.0%)	12(13.3%)

※公的相談機関は、ギャンブル問題が主訴の者のみ抽出して解析した。

●過去1年間で最もお金を使ったギャンブル
公的相談機関の来訪者、自助グループ参加者ともに、パチスロ、パチンコ、競馬の順で多い。
●1カ月にギャンブルにかかる金額(中央値): 公的相談機関→7.5万円 自助G有志→10万円
●公営競技をする者における主な券の購入場所: インターネット購入を利用する者が多かった。

【図表4】 過去1年間で最もお金を使ったギャンブルの種類



※宝くじ等には、ロト・ナンバーズ等、サッカーくじも含む
※※その他のギャンブル:証券の信用取引、先物取引市場への投資、FX、インターネットを使ったギャンブル(競馬、競輪、競艇、オートレースを除く)、海外のカジノを含む

【図表5】 公営競技:主な券の購入場所

	公的相談機関				自助グループ有志			
	ギャンブル場, または, 場外売り場	オンライン (インターネット)	ギャンブル場/場外とオンラインの両方	全体	ギャンブル場, または, 場外売り場	オンライン (インターネット)	ギャンブル場/場外とオンラインの両方	全体
競馬	2	11	3	16	2	12	4	18
競輪	2	7	1	10	0	6	0	6
競艇	2	3	4	9	1	5	3	9
オートレース	1	1	1	3	0	2	0	2

※欠損数: 公的相談機関(競馬=1, 競輪=1, 競艇=1, オートレース=1)

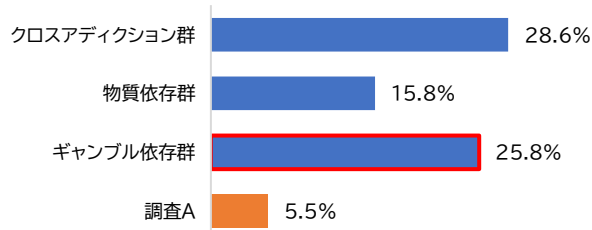
調査B 当事者回答 ～多重債務・貧困・自殺・虐待・犯罪などのギャンブル関連問題～公的相談機関の結果

依存・嗜癖問題の主訴の種類によって、3つのグループ(ギャンブル依存群(64名)、クロスアディクション群(7名)*、物質依存群(38名)に分類しギャンブル関連問題を比較 ※クロスアディクション群に含まれる総数が7名と少ないため、3群間の比較結果については参考程度

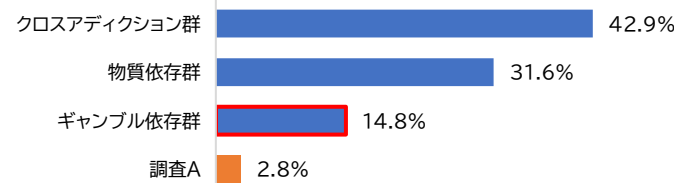
- 「生活保護の利用経験がある者」の割合は、公的相談機関(男性21.1%, 女性37.5%)、自助グループ有志(男性13.6%, 女性33.3%)であった。
- 「債務整理(自己破産・個人再生・任意整理等)の利用経験がある者」の割合は、公的相談機関(男性37.1%, 女性55.6%)、自助グループ有志(男性54.6%, 女性33.3%)であった。
- 「抑うつ・不安の問題を持つ者」および「希死念慮・自殺企図の経験がある者」「小児期逆境体験が1カテゴリ以上ある者」の割合は、3群で同程度であった。しかし、いずれの割合も調査Aの一般住民を対象とした結果に比べると高い割合であった。
- 「触法行為を含む問題行為」の経験は、ギャンブル依存群では、家族や知人のカードを勝手に使った(31.7%)、会社のお金を横領した(22.2%)といった行為の割合が、物質依存群に比べて高かった。

【図表6】 ギャンブル依存と抑うつ・自殺・小児期逆境体験との関連

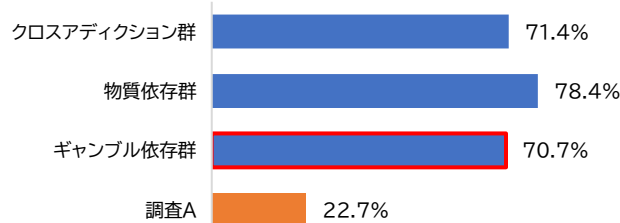
●抑うつ・不安：K6得点13点以上「重度の抑うつ・不安がある者」の割合



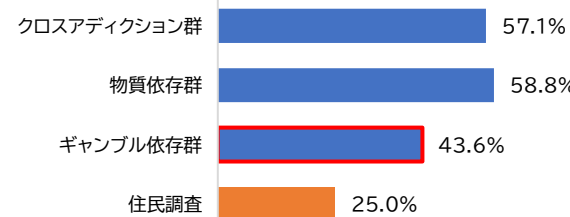
●自殺企図の経験(生涯)がある者の割合



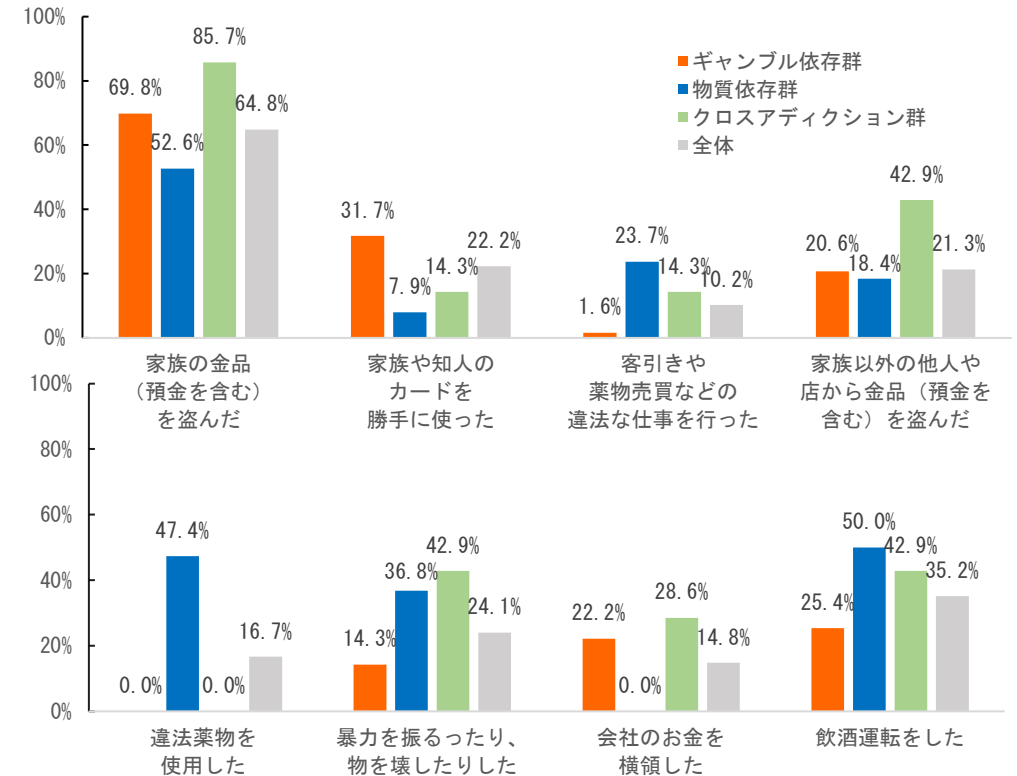
●希死念慮の経験(生涯)がある者の割合



●小児期逆境体験※が1カテゴリ以上ある者の割合

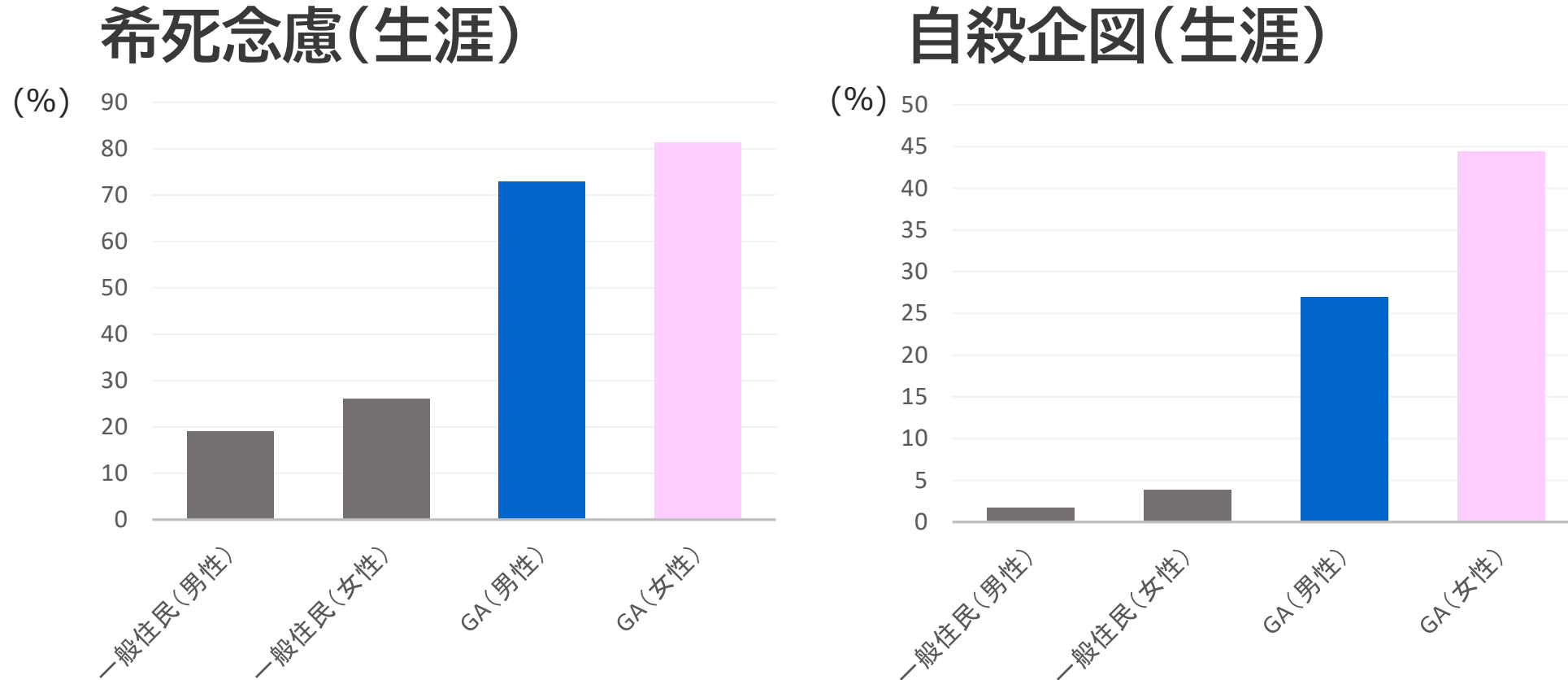


【図表7】 依存問題と触法行為を含む問題行為



※18歳までに経験した逆境的体験(被虐待体験、精神疾患のある人との同居、両親の離婚など)のこと。

【図表8】 「希死念慮・自殺企図の生涯経験割合」 ギャンブル問題の自助グループ有志と一般住民調査結果の比較



住民基本台帳より無作為に抽出した18歳から74歳までの8,223名（男性3,955名、女性4,268名）
および調査に協力した自助グループ有志162名（男性143名、女性19名）の比較

調査B 当事者回答 触法を含む問題行為とギャンブル問題～ 自助グループ有志の結果

【図表9】 ギャンブル問題の自助グループ有志における触法を含む問題行為の経験

	男性 (n=138)	女性 (n=17)	全体 (n=155)
家族の金品（預金を含む）を盗んだ	100 (72.5%)	9 (52.9%)	109 (70.3%)
家族や知人のカードを勝手に使った	47 (34.1%)	4 (23.5%)	51 (32.9%)
客引きや薬物売買などの違法な仕事を行った	5 (3.6%)	1 (5.9%)	6 (3.9%)
家族以外の他人や店から金品を盗んだ	46 (33.3%)	2 (11.8%)	48 (31.0%)
違法薬物を使用した	6 (4.3%)	0 (0.0%)	6 (3.9%)
暴力を振るったり，物を壊したりした	26 (18.8%)	4 (23.5%)	30 (19.4%)
会社のお金を横領した	42 (30.4%)	3 (17.6%)	45 (29.0%)
飲酒運転をした	42 (30.4%)	1 (5.9%)	43 (27.7%)

調査B 当事者回答 ～相談援助を求めた経験、行政に求める支援～

●依存の問題で相談や援助を求めた経験

公的相談機関の来訪者※は「医療機関の受診」が最多(49.6%)で、次いで「自助グループ」(41.6%)、公的な相談機関(34.5%)。

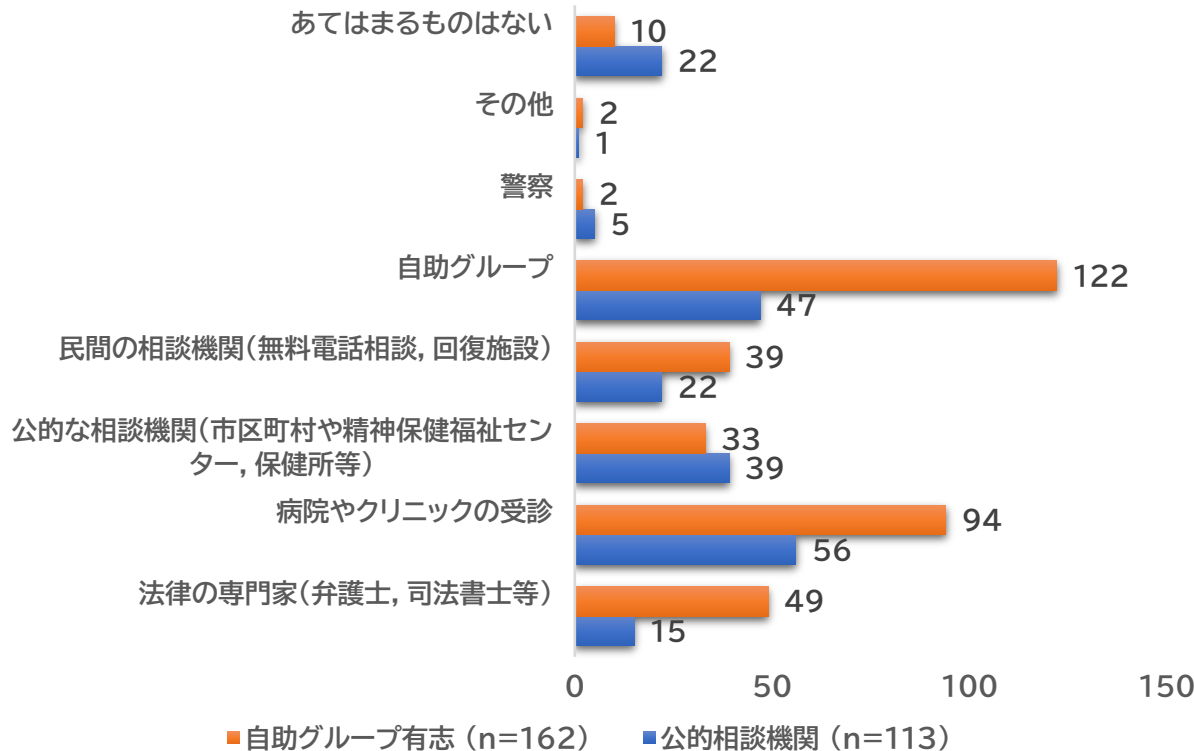
自助グループ有志では、自助グループ(75.3%)、次いで、「医療機関の受診」(58.0%)、「法律の専門家」(30.2%)の利用が多かった。

●依存問題のある当事者が行政に求める支援

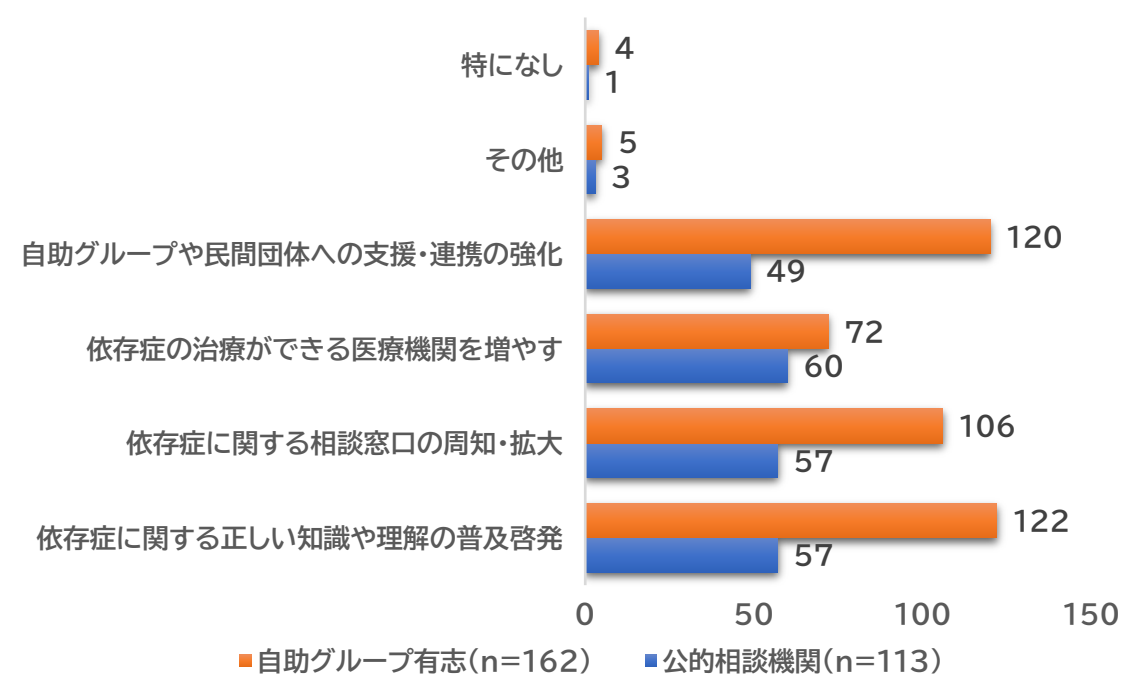
公的相談機関の来訪者※は「依存症の治療ができる医療機関を増やす」の割合が最も高かった。

自助グループ有志は「依存症に関する正しい知識や理解の普及啓発」の割合が最も高かった。

【図表10】 依存の問題で相談援助を求めた経験 単位:人数



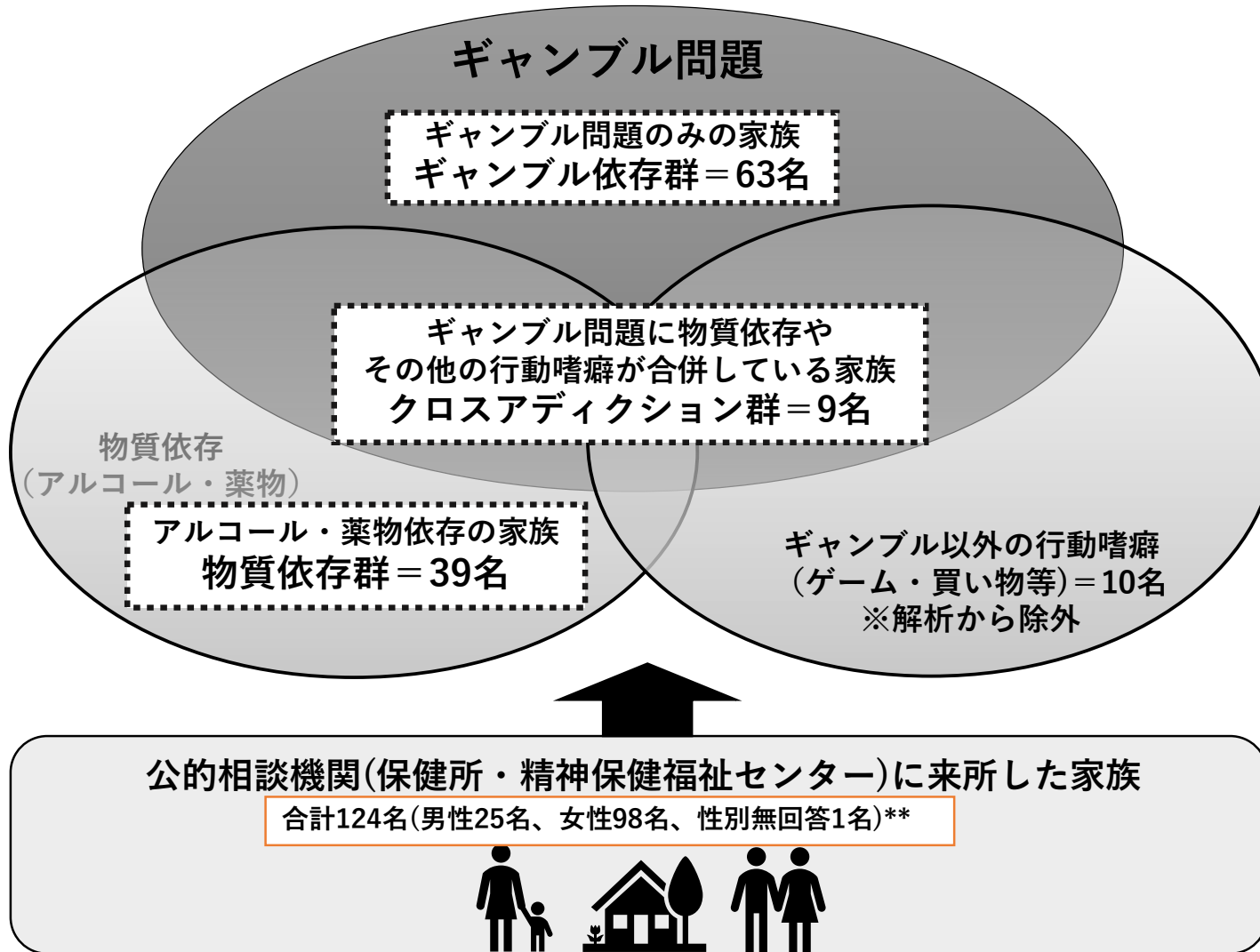
【図表11】 依存問題のある当事者が行政に求める経験 単位:人数



※公的相談機関の来訪者(n=113)には、ギャンブル問題の他、アルコールや薬物、ネット・ゲームなどさまざまな依存の問題で来訪した者を含む。

家族回答 有効票の概要

当事者の依存・嗜癖の問題で群分け



ギャンブル問題を抱える家族
①～④のいずれかの方法で調査に参加

- ①保健所・精神保健福祉センター
開催の自助会にて調査案内受取り
- ②保健所・精神保健福祉センター職員から
の案内で調査案内受取り
- ③地域の自助会会場で調査案内受取り
- ④家族会からの呼びかけで調査協力
(インターネット回答のみ)

ギャンブル問題の家族向け
自助グループ有志

合計381名 (男性32名、女性349名)



**[問10]で当事者の依存問題が無回答の3名は解析から除外

*[問8]で調査票を受け取った場所が無回答の110名は解析から除外

調査B 家族回答 ～公的相談機関に来所した家族とギャンブル問題のある家族の自助グループ～

●回答者の内訳

公的相談機関(n=123)※ 男性25名(平均60.0歳)、女性98名(平均55.3歳)
 家族の自助グループ(n=381) 男性32名(平均60.7歳)、女性349名(平均53.4歳)

公的相談機関、自助グループともに、当事者との関係は、「当事者の親」が過半数、次いで約4割が「配偶者」であった。

●当事者のギャンブル問題に気付いてから相談支援機関や自助グループにつながるまでの期間

★公的相談機関の利用者(n=42)→平均58.2カ月
 ★家族向け自助グループの利用者(n=334)→55.5か月
 上記利用のきっかけは、「自分からホームページで探した」が最も多く、次いで「医療機関ですすすめられた」であった。

●当事者のギャンブルのためにした借金の立て替え経験

約60%の家族が「立替経験あり」と回答。

家族が当事者のギャンブルのためにした借金を立て替えた金額

★公的相談機関(n=43) : 中央値300万円(最小30万円～最大1億円)
 ★家族の自助グループ(n=228) : 中央値380万円(最小200円～最大8000万円)

●当事者のギャンブル問題から受けた影響

「借金の肩代わりをした」の割合が最も高かった。
 (公的相談機関の来訪者63.9%, 自助グループ利用者77.8%)。
 次いで、「ギャンブルをやめられない人に怒りを感じた」、「浪費、借金による経済的困難が生じた」の割合が高かった。

【図表12】 当事者のギャンブル問題から受けた影響(家族:複数選択)

	公的相談機関 (n=72)	家族向け自助グループ (n=378)
浪費, 借金による経済的困難が生じた	37(51.4%)	205(54.2%)
借金の肩代わりをした	46(63.9%)	294(77.8%)
金品を盗まれた	25(34.7%)	186(49.2%)
殴る蹴るなどの暴力を受けた	7(9.7%)	22(5.8%)
家庭不和・別居・離婚を経験した	21(29.2%)	153(40.5%)
うつ状態になった	14(19.4%)	97(25.7%)
脅しや言葉の暴力を受けた	16(22.2%)	100(26.5%)
ギャンブルをやめられない人に怒りを感じた	45(62.5%)	273(72.2%)
子への暴力や不適切な養育をしてしまった	10(13.9%)	63(16.7%)
アルコール問題(飲酒運転を含む)が生じた	2(2.8%)	23(6.1%)
あてはまるものはない	3(4.2%)	5(1.3%)

【図表13】 家族の要望する支援や情報

	公的相談機関 n=123※	家族向け 自助グループ n=381
気軽に相談できる場所の情報	99(80.5%)	296(77.7%)
病気を理解するための知識や情報	91(74.0%)	303(79.5%)
当事者を治療につなげる関わり方	91(74.0%)	291(76.4%)
依存症の治療方法	85(69.1%)	233(61.2%)
家族自身の心身をケアする方法	83(67.5%)	283(74.3%)
当事者が作る借金への対応	61(49.6%)	228(59.8%)
当事者の依存以外の心と体の病気への対応	61(49.6%)	177(46.5%)

※公的相談機関の来訪者(n=123)には、ギャンブル問題の他、アルコールや薬物、ネット・ゲームなどさまざまな依存の問題で来訪した家族を含む。

調査C ギャンブル関連問題に対応する相談機関の実態調査

【調査の概要】

●目的:「ギャンブル関連問題に対応する相談機関」におけるギャンブル等依存の問題の相談経験や課題について調査

●調査対象 (虐待) 児童相談所、保健センター
(貧困) 社会的包摂サポートセンター、福祉事務所
(多重債務) 司法書士総合相談センター、消費生活センター
(自殺) 日本いのちの電話連盟、地域自殺対策推進センター、保健所推進

●有効回答:165件

(1)ギャンブルの実施状況の確認

全体の64.2%が「相談内容次第で状況確認」を行っている。関連問題の分野別に見た場合、「相談者全員に状況確認」を行っている割合が高いのは、「自殺」「多重債務」に係る相談機関(12.0%、10.3%)。

(2)ギャンブル問題が関与する相談の対応経験・紹介先

●「虐待」に係る相談機関で56.3%、「貧困」「多重債務」「自殺」に係る相談機関で7割以上で、ギャンブル問題が関与する相談に対応経験がある。

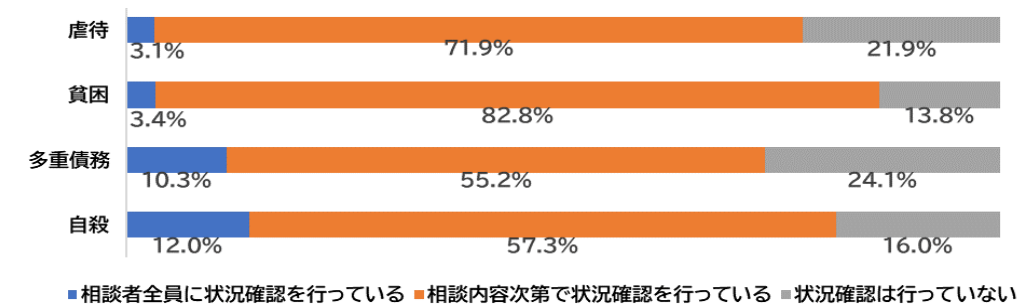
●相談事例があった場合の紹介先は、医療機関が40.6%で最多、次いで、精神保健福祉センターが38.2%、自助グループが35.2%。

(3)ギャンブル問題の支援について必要だと思うこと

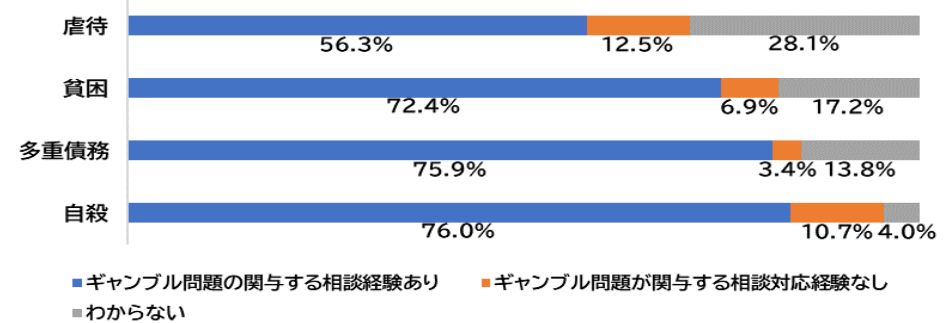
※ギャンブル関連問題の組織区分ごとに主な意見(自由記述回答)を抜粋

虐待	・支援者も家族も依存症について正しい知識を持つことが必要。・ギャンブル依存症に対する知識の習得、相談機関との連携 ・当事者が気軽に相談できる場所の普及啓発が必要。
貧困	・ギャンブル依存の基礎知識と支援職へのスーパーバイズが必要。・医療機関への通院指導が必要。
多重債務	・ギャンブル問題に関する正しい知識をもった司法書士の育成。・関係機関との連携と専門機関での問題解決。・ギャンブル等依存症が病気であることの認知度の向上が必要。
自殺	・ギャンブル問題に特化した相談対応のための研修が必要。・多角的な支援を継続的にコーディネートできる機関が必要。

【図表14】ギャンブルの実施状況の確認



【図表15】ギャンブル問題が関与する相談の対応経験



【図表16】ギャンブル問題が関与する相談の対応経験・紹介先 単位:%

